



八代傳八幡下快桂窓評

曾
600
82



出づるはしをききしお、
彼のおもひもいふは、お場をききし、
計をききし、八犬士のいふは、
をこのおと、完の工、
利をききし、て、おや、は、
の苦心も、
友行か、
百の、
あて、
せん、
二大士を、
重た、
その、
あ、
と、
四大士の、

出づるはしをききしお、
彼のおもひもいふは、お場をききし、
計をききし、八犬士のいふは、
をこのおと、完の工、
利をききし、て、おや、は、
の苦心も、
友行か、
百の、
あて、
せん、
二大士を、
重た、
その、
あ、
と、
四大士の、

五絨のあふふ美の華外とて月をちかむるや又船楫を
浪の月ひびぬるも盛ちかき一返

其行有種も四力士の徳も後いふらぶ一現八の徳も
大角の一役はくはけはる一まふ並をききけはる
ぬらぶ一大角の武術指の片をうりまふ今もまふ
くひくはるもははるまふまふまふまふまふまふ
靈験のまふも又妙や又冤屈を冤屈まふまふまふ
いふまふ首尾まふまふまふ

四力士及び宅まふ酒宴のまふ一穴の計を戯
柿のまふまふまふまふまふまふまふまふ

四力士及び有種と相付まふ一陸城練るの必書をまふ
ちかむるまふ水垣のまふ船練るまふまふまふまふ
おれまふ四力士まふ二の井まふまふまふまふまふ
後進言まふまふまふまふまふまふまふまふ
まふ前も後進言まふまふまふまふまふまふまふ
かまふまふ後進言まふまふまふまふまふまふまふ
重たの二力士まふまふまふまふまふまふまふまふ
後まふの一體まふまふまふまふまふまふまふまふ
信の道前まふ甲斐指月殿まふまふまふまふまふまふ
大角の甲斐まふまふまふまふまふまふまふまふ

くひちちいもまゝに大に獨石木を旗立所廿分有らむい何の事
あつしとあつし大獨石木を旗立所廿分有らむい何の事
とふがくあつちあつちとふはまゝ妙

大泥の件大に役はくく妙つういふ妙ことい何の事
自註ももくくく五服ももくく妙つういふ妙ことい何の事
曾まきあつちい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
あは清僧あつちい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
はるもく妙つうい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
あは清僧あつちい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
自いももくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

はるももくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
富山の形も大に役はくく妙つういふ妙ことい何の事
はるもく妙つうい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
僧俗の事あつちい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
穴の案内も大に役はくく妙つういふ妙ことい何の事
あつちい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
是又あつちい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
あつちい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
あつちい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事
あつちい何の事又水餅の身香深とく妙つうい何の事

五十一の瀬をいふたまた大の行状よりいふ
物のこの語もつれづれ今世より麻布のみみ宜れ
といふおもしろいこと

第八十八回 第八十九回

廿二回八輝の内服よりいふ文と佳境いふより評をいふ
事おもしろいこと

湯治のよめめお江戸の代りあると禁正のいふよりいふ
代りおもしろいこと作者おもしろいこと

毛節を坐撃平師にはりわたるいふこと八丈の内
坐撃平師よりいふこと

八丈の内をいふこと南極星の坐撃平師にはりわたるいふこと
八丈の内をいふこと

八丈の内をいふこと南極星の坐撃平師にはりわたるいふこと
八丈の内をいふこと

八丈の内をいふこと南極星の坐撃平師にはりわたるいふこと
八丈の内をいふこと

八丈の内をいふこと南極星の坐撃平師にはりわたるいふこと
八丈の内をいふこと

八丈の内をいふこと南極星の坐撃平師にはりわたるいふこと
八丈の内をいふこと

八丈の内をいふこと南極星の坐撃平師にはりわたるいふこと
八丈の内をいふこと

和帛の枝葉を熟覽す。に世中おるあはしのうきこと
りちにおあはるるに、又毛世、真面目に
とれり、その人おの論を、和漢の故きをひらいてせせり、
作者おの論、その論今の俗事、
とくとも其心、

及第のおもをも世、ついで、道常の復讐の
をわのよふ、先着安を、せん、佐天の
ぬや、おの朝を、坐撃、
とり、又、腹中
ふ、毛世、

あまのま、
次、
ひき、
お、
又、
蟹、
郷、
毛、
と、
あ、

莊介と我々の縁は縁うしとさくさく子孫向人
妙ふ又妙とて神変の思儀もさびつる
色世の由はあらずとて馬加敏の吹小文をさびし
堀をわつとばさすといふとみるふ形状うあざり
葉を精よむむとて事なきとてすまかしくあはれ
強もいとのうの後の文に守加の初めとていふ論
あくくとも妙なりとて作者は用を甚井後統の
一件とも張り月もあはれとて大遠とておま
をわくとも頼もといふとてはいねとておま

先惠の北國記のちういふとて人の命はすのちういふ
何の増藏本をいふとて平月とていふとていふとていふとていふとて

錦の初めは感魚をみわたりとて中世の
みくもはて大いといふとていふとていふとていふとて
おかりぬ湯のゆのえんをいふとていふとていふとて
ハハ解目の上はの向の文句は二里二里あまといふ
ま子といふとていふとていふとていふとていふとて
ハハいふとていふとていふとていふとていふとて
坐撃大のたをいふとていふとていふとていふとて
白くといふとていふとていふとていふとていふとて
殺兵やむ名をいふとていふとていふとていふとて
難とていふとていふとていふとていふとていふとて

雑兵の銃をよめ初めはわらひし隙は直々の所
せりある。戸隈の所より隙をききあはれ名取
あらしはれぬ所ありし。

守如のせむと家守の場守如のせむと敵と
連つたときのもみせむと又そのときを縁連つたとき
おもひよる。時合の敵の自衛せむと守如の
あらしはれぬ所ありし。守如のせむと敵と
守如のせむと家守の場守如のせむと敵と
縁連つたときのもみせむと又そのときを縁連つたとき
おもひよる。時合の敵の自衛せむと守如の
あらしはれぬ所ありし。守如のせむと敵と
守如のせむと家守の場守如のせむと敵と
縁連つたときのもみせむと又そのときを縁連つたとき
おもひよる。時合の敵の自衛せむと守如の
あらしはれぬ所ありし。守如のせむと敵と

守如のせむと家守の場守如のせむと敵と
縁連つたときのもみせむと又そのときを縁連つたとき
おもひよる。時合の敵の自衛せむと守如の
あらしはれぬ所ありし。守如のせむと敵と
守如のせむと家守の場守如のせむと敵と
縁連つたときのもみせむと又そのときを縁連つたとき
おもひよる。時合の敵の自衛せむと守如の
あらしはれぬ所ありし。守如のせむと敵と
守如のせむと家守の場守如のせむと敵と
縁連つたときのもみせむと又そのときを縁連つたとき
おもひよる。時合の敵の自衛せむと守如の
あらしはれぬ所ありし。守如のせむと敵と

遊あそびの事こともあま今いまたたつつれれここもも作し者者のの心こころをを丹たん心しん
小余こよららくくてていいふふ事ことなり

此こゝのの蜜みつ飲いんををままくくののああららくく看かん友ゆうももああららくくははるる也なり
たたれれくく道みち帯おびああららくく始はじめ終はつををああららくくたたるる案あん外がいままららくくたたまま
いいつつももああららのの武ぶ士しままいいふふ事ことなりなり也なり
かかれれててななららずずのの筋すぢままららくく道みち帯おびといいふふ事ことなりなり也なり
らられれるる又また神かみのの心こころををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
ええ其その本ほん筋すぢのの心こころををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
とと歌うた討うちををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり

事ことのの心こころををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
ああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
守まもりりのの心こころををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
たたままららくく事ことなりなり也なり
ああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
とと歌うた討うちををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
すすりりのの心こころををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
ひひろろのの心こころををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
其その心こころををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり
貴きろろのの心こころををああららくくたたままららくく事ことなりなり也なり

看及この回いそふ敵討をんとおもお替なる敵の片
ぬけていそふ又とかきいそふれて船中の一件をいそふた
案外なりすて八十八回九十九回八美の所場あゆ一才
夜鷹のチヤリ場まゝ糸をぬれたるも何のぬりり
あまのひくそふあめ 船中の夜鷹まありて舌をかみ
きりたおとま仕打といとたかきそふとぬき
ハ下天幕の中もあふさういそふとふようゆきととぬきと
まらぬとふといそふの文句何の妙なりけふの妙又
句義少年縁おえ候籍様の夕粧の似ふ文辨よく

ももをねえ曲妓お虫は天にけり顔のうはらみ
自由自在

ハ下キウをぬれつとつとひきのこふりお合筆もままの妙又
句又井公なりは佐者の妙とて淫奔の場ハ淫奔の詞を
かゝれて縁連の船中も各はうと新雨のまもふ
そこの揃えは新の前夜をぬきとて境をいそふとてはいて
入る客も客もなるといふ又句前後おとてつとふいと
ふとて入りお佐者おとぬきと淫奔いそふて世人をばます
の一事いそふとていそふとていそふとていそふとて
まらぬとていそふとていそふとていそふとていそふとて

内より二大士が出ると所いともてゝ一八十四回の船の場
航るはうといふをたしませるを志のく^紅壺内よりと
志のひねると自然のちりゝゝその後二大士の遊とあるは
新いともてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
を平の法をいふをたしませるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たふ船乗りつげゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
美より出ると虚りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
尺さふ又妙ゝゝ

ハ丁 後と波うた大叶喚きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
十五

文に詩の妙にせられたる作者の心づゝゝゝゝゝゝゝゝ
とこの趣きを一掃したるうらの上のうらとあてゝ六
上ゝ人あまのれは実情をいふもあゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いざれたるも美し妙なり^紅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
船中の事には船乗の心事のいふおしゝゝゝゝゝゝゝ
とあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
舟のあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
同様の事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

〜〜〜あまほの〜との住者か月乞甚并乞を
いひ〜〜

鉄炮の〜と新あめれと三新を〜顔い〜
〜一白耳〜げこれ又歟

道筋とを世とら敵弁の二階あるも〜
敵弁の〜配〜姉〜あり〜六太士を〜
〜い〜

及藤を世うお望を〜道〜筋に第九輯物〜
〜多〜的〜あ〜い〜る〜先〜の〜筋〜
〜い〜の〜筋〜の〜大の〜筋〜
〜い〜

柱意

室十一月十七日

著作の堂老先生
〜

〜 柱意多月中 意手 徳 九字 遠 二 意 ち 二 意
虫 扱 二 意 有 二 意 且 拙 又 二 意 我 二 意 二 意 二 意 二 意
虫 扱 二 意 二 意 二 意 二 意 二 意 二 意 二 意 二 意 二 意

〜 由一 笑

八犬傳九編物語清徳入道物語の巻
糸清の書下業不_レ清貴其_レ中情_レに
至_レ河_レ中_レ必_レ海_レす_レ其_レ新_レを_レ見_レけ_レる_レ新_レ巻_レ
其_レ小_レく_レは_レく_レ清_レ市_レ教_レ不_レ再_レ之_レ懸_レ候_レ傳_レ中_レ地_レ
始_レ白_レ心_レ作_レ事_レ斗_レと_レ月_レく_レあ_レ及_レを_レ赤_レ酒_レ一_レ巻_レ清_レは_レり_レ
清_レは_レり_レ一_レ清_レを_レ一_レ言_レく_レ清_レ貴_レ其_レ河_レ一_レ口_レを_レつ_レぐ_レみ_レか_レ
なく_レ中_レ地_レ縁_レと_レ清_レ貴_レ一_レ巻

曾_レ三_レ丁_レ皮_レを_レこ_レと_レわ_レら_レわ_レ候_レ字_レを_レ端_レに_レる_レ
あ_レく_レ心_レが_レえ_レり_レあ_レら_レわ_レる_レあ_レ酒_レ一_レ清_レ一_レ巻_レあ_レり_レ
候_レ一_レ二_レ巻_レ中_レ地_レを_レ見_レる_レ一_レ巻_レ一_レ巻

物持とまじりて
下なる事なり流
うらやまふわ
才百回の
区魂香一尾香を
控中より朝多
白人の海をれ
くもつとを二
して五の志は
あつたふら
めを
返魂術を異
むる強
とやふ

玉面嬢、一、事、流、事、一、事、再、三、お、考、え、い、
物持、い、あ、さ、う、さ、こ、こ、玉、面、嬢、い、洞、里、見、家、怨、
あ、か、を、い、つ、れ、玉、面、嬢、い、玉、持、の、ま、の、事、な、ん、と、
望、ひ、て、物、持、お、ま、非、之、再、考、し、玉、面、嬢、い、名、
な、し、バ、才、一、事、八、房、夫、氣、を、の、ま、せ、る、狸、さ、
む、八、百、比、久、た、玉、面、嬢、い、洞、物、さ、う、一、玉、持、の、
穴、の、事、一、八、百、比、久、た、が、術、と、物、を、さ、し、狸、い、上、
穴、を、ほ、ま、か、な、り、か、み、み、時、玉、持、の、怨、恨、厚、山、の、
一、之、解、脱、さ、れ、バ、一、旦、狸、ま、り、一、怨、恨、未、解、脱、
一、て、又、里、見、の、家、怨、を、な、す、事、と、お、ま、り、な、さ、

青尾とわたり狸の事、あれ、ゆ、な、ん、と、着、た、り、
序、ら、ふ、再、お、ま、り、結、を、つ、ら、と、一、事、な、り、
御、の、事、ま、ま、し、青、尾、い、い、い、い、い、い、事、感、ぶ、
御、の、青、尾、を、い、い、い、い、い、い、例、の、事、な、り、
ま、り、こ、の、御、さ、ら、い、な、あ、し、玉、面、嬢、
か、の、狸、を、い、い、い、い、狸、い、玉、持、の、怨、
恨、一、て、怨、恨、あ、さ、る、玉、面、嬢、い、洞、物、さ、
て、洞、物、さ、
翻、懲、を、考、へ、て、さ、う、て、後、玉、持、と、つ、ら、い、を、
む、る、又、さ、の、み、流、一、て、さ、う、一、事、玉、持、の、怨、恨、

をねてつりふ事、中より、
月ハ初ハ名又つりて勸懲ハ
この子ハそこが勸懲ハ
九とハハ、保あとも、
うりも、識又ハ、
あおちて、
かこりハ、
も、
勸懲を、
めうも、

事ハ、
勸懲を、
賊首、
始ハ、
け、
文、
善、
ハ、
の、
里見、

教とて宗師の言ふらるる勸徳の言は河に
及とあふりて不浄を言ふて起つて處心再
十と云ふなり

銘本有年と云ふ人、淨に宗を感心し、
淨無淨をわけて、智のさき分、文書初
は有年と人、淨を淨と云ふ人、
一乃の言はるなり

志して、
一乃の言はるなり

桂心

晉書一、大志、淨作信、信、
信、付、無、淨、精、妙、分、
唐、山、一、書、
か、
行、
と、
淨、
か、
松、
保、

存きあはぬが世に為るる

清以書、播松、松梅と名つけ、その名はあつた
云々とあるは、聖業に、播松、松梅とあつたらむは、
久松の名をとりて、ひつたるふん、播松の地をうねじ
志し、世をあらねば、いまだ、幸甚、其、男、其、一、聲、會、ふ、れ、り
と、その名を、う、用、ひ、ら、れ、る、は、似、つ、り、う、ね、松、れ、が、あ
れ、者、う、ら、ぬ、月、く、考、男、其、女、と、も、魂、目、魂、中、ら、る、
海、赤、一、罪、二、つ、り、り、一、松、赤、一、目、つ、み、ね、い、れ、り、
幸、く、せ、お、そ、め、ら、松、の、事、を、う、ね、い、ま、を、伝、傳
せ、ら、れ、る、もの、と、う、一、松、赤、い、れ、り、勸、徳、を、い、れ、ん

とてうがうとてうもの、とてうの、戯、お、そ、め、ら、松、の、事、を
り、て、着、な、ら、ぬ、一、を、せ、ら、れ、る、もの、可、否、を、ね
る、

垣衣の事、聖業、松、一、清、深、清、深、の、世、を、て、は
の、書、と、名、を、い、つ、と、う、ね、文、物、と、い、ひ、三、松、何、松、梅、
時、世、と、い、考、あり、か、ら、り、い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
そ、の、日、の、世、の、世、を、う、一、と、う、と、う、松、赤、の、世、を、あ、
く、つ、ま、ね、ら、る、世、を、あ、い、は、い、は、い、は、い、は、い、は、い、
と、その名、い、れ、る、もの、と、う、一、松、赤、い、れ、り、
名、を、い、れ、る、もの、と、う、一、松、赤、い、れ、り、

つよねるにいとくふく——とくは懐きし御徒自
 性もあづくこもあつくあつりこの必は自性ハ偽也
 こそ懐きをこそまのむ向うふらうつらうとて
 いとまはす——こと、難儀の場ハ才思集三十八回たふ
 千里鏡の戻し——と懐衣の字をいひのいもせいでい
 のねねらふとま河いさすよとまぬねて十七下ウラ
 十行メ、又ウミのりうとて懐衣をいひてき——道
 こそ——希想——とのみかたれて着衣の字——つねね
 子せうねらふ、自生変化し妙文とあづ——着衣ハ心
 つらねる見切ての切——と子ニ字添、肝文やこの

一戻りのとふく感心のみ、相伝ふ人あし可きいん
 取な——とふく

津島書し世再ら懸渡は新史し、足柄まを
 けし書し、心あふた、心書とてさすけや、ハ
 表おこし、とておと、懐衣ハ、系懸渡の時、是
 書、ハ、書、を、御、し、つ

本集三十八回千里鏡一戻り一の箇月、とて、う、け
 つ、戻、り、お、と、し、つ、が、け、け、文、と、い、ち、り、し、け、お、と、ハ、か
 と、あ、け、つ、し、け、文、ハ、三、十、九、回、と、い、ま、き、の、下、に、け、三、十、八
 回、ハ、け、二、下、行、文、と、い、ち、り、し、の、け、文、と、い、け、ハ、前、に、け、せ、し

千里鏡の腹を従ふ
 三十三日ノ間日奉を
 十一年(明)に於て
 是人の心もくもあ
 事をもよおす事
 あり誠心ありは是の
 事と結ぶ動もつ
 とありて跡を

千里鏡の腹を従ふ
 三十三日ノ間日奉を
 十一年(明)に於て
 是人の心もくもあ
 事をもよおす事
 あり誠心ありは是の
 事と結ぶ動もつ
 とありて跡を

千里鏡の腹を従ふ
 三十三日ノ間日奉を
 十一年(明)に於て
 是人の心もくもあ
 事をもよおす事
 あり誠心ありは是の
 事と結ぶ動もつ
 とありて跡を

ふおてもおすうくつらくみづれゝる筋なるニ末は只一筋
 とかりて四十回をくくと結のつぎゝる高州(女)
 といふてあゝる猿のわあしはすかち二十九回の月
 とありて好意の心猿おき事一巻紙をさすゝと
 けあゝしつひ書きてち文おぬけけ月駿馬骨に
 とありハ心猿の對ニ意馬をたせしめるありけいゝと
 といハ姑之娘の意馬をさすけいゝと心猿を狂ハ心猿意馬
 ありといハ仙術をさすハ姑之娘ハ意馬をさす意
 馬ハ初枯骨のこととさすてよりて駿馬骨ハ初
 姑之娘の意馬をさすて好意ハ心猿ハ初

くまのむねの意馬の神も狂を狂とわらふあ
らうまうまうまの舞を悦ぶらう舞を悦ぶらう
まうまうまうまの舞を悦ぶらう舞を悦ぶらう

太い高書熟語の付子と世のうらや
新の付子と世のうらや

十うの付子と世のうらや
十うの付子と世のうらや

号の付子と世のうらや

桂家

著作堂主人

